メインシナリオ／サイド第３回
『滅びを望む者たち　第３話』個別リアクション

『さよなら』

　アーリー・オサードと、シャンティア・グティスマーレは、廃坑の入口側で桶に水を溜めていた。
「この辺りでは一度にたくさんの水を作ることは出来ませんが、池が見える場所に出れれば、その……もしかしたら……」
「そうね。綺麗な飲み水が作れるかもしれないわね。量が多くなっても、彼が運んでくれるでしょうし」
　言って、アーリーはウィリアムに目を向けた。
「傷口が開かない程度だと助かる」
　そう答えて、ウィリアムはアーリーたちと山を少し登り、池が見える方向へと進んだ。
「ええっと、良く見えません……。ああでも、なんとかします……」
　飲み水の作成に失敗したら、酷い目に遭わされるかもしれない。
　恐怖に震えながら、シャンティアは目を細めて遠くを見る。水を浮かせて、水蒸気にして、ここまで運び、そしてまた水にする……でも、遠すぎる。
「もう少し近づいた方が……」
　シャンティアは引きこもって魔法の本ばかり読んでいたため、魔法知識に優れていて魔力がとても高いのだが、行使能力はそこまで高くはなく、維持する体力もない。
「体は大丈夫か？」
　よたよた歩いて行くシャンティアに続きながら、ウィリアムはアーリーに問いかけた。
「……なんともないわ」
　そう答えるけれど、彼女の顔からは疲労の色が消えていない。
「あのさ。アーリーの家族ってどんな奴等だったんだ？」
「そんなこと聞いてどうするのよ」
「俺には、血のつながらない家族は居たが、血の繋がった家族がいなかったからな。なぁ、家族ってどんなものだったんだ？」
「私の父と母、そして祖父母も目立たず真面目に生きていた。本当はどんな人だったんでしょうね？　私は厳しく育てられたけれど、凄く――愛してもらったわ。家族は良いものよ。でも残念ね、もうこの世界に未来なんてない。
　私もあなたも、血のつながった家族に恵まれることなんて、ないのよ」
　アーリーは薄く微笑んだ。
「このままだと、アンタは壊れる。自分自身が思ってるほど強くないと思うぞ」
「もう、壊れているのかもしれない。強くないのは知ってる。でも……強くならなきゃいけない」
　暗い瞳の彼女の口から出た言葉は、抑揚がなく呪文のようだった。
「学校の件は一人で抱え込むな。俺にも責任がある、不用意に追い詰めた。追い詰めなければ、覚悟を見せる為に動かなかった筈だ」
　ウィリアムの言葉に、アーリーは静かに首を横に振った。
「俺等を魔法から守ってるだろ」
「守ってなんかないわ」
「必要な事を覚悟を持ってやろうとしているのは解る。
　だが、方法は本当に正しいのか？　犠牲を減らす、別の方法が無いか諦めずに考えてほしい」
　途端、アーリーの暗い目に、悲しみの色が溢れていくのをウィリアムは見た。
「それは望む処だろ？」
　アーリーは首を横に振る。
　何度も何度も横に振る。
「望んでない。皆、滅びるべき」
　違う、それは彼女の本心ではない。
　少なくても、守る必要のない自分を、あの時――。
　反撃の炎に包まれた時、ウィリアムの手を掴み、彼女は熱から自分を守った。恐らく一族の特殊能力で。
「何か調べに行く必要があるなら、俺を使え。神殿に資料が有ったりしないのか？」
「ウィル」
　低い声で、アーリーはウィリアムの名を呼んだ。
　ウィリアムを見つめる瞳には、深い悲しみが溢れている。
「血のつながった家族、大切だったわ。私も、自分の家庭持ちたかった。普通の女性のように、恋をして結婚をして、子供を産んで、ささやかな家庭を持ってみたかった。
　でも、それは叶えられない夢だった。家族への愛を知っていたからこそ」
　憎しみと悲しみが溢れ、彼女の声は震えていた。
「あなたは何で、死を望んでくれないの。生きたいって言わないで。希望なんて何もないんだから、絶望して、みんなみんな死ねばいいのよ。犠牲は減らさせない、絶対に！」
　強く言い切った彼女の目には、涙が浮かんでいた。

「あの子が皆に絶望を伝えてくれるわ。そして私は殺されるの。人々は自らの手で希望を断つのよ」
　彼女が描いた破滅のシナリオは、絶望を知らしめ、人々が自ら死を望み破滅していくこと……。
「シャンティア」
「は、はい。な、なんでしょう……」
　怒りの声に、震えながらシャンティアが近づいてくる。
「これをあげるわ。曽祖父様が私に残してくれた手記」
「え？」
「さよなら、シャンティア、ウィル。私が死んだあとは、あなた達が絶望を広めてね」
　言うと、アーリーは突如、思い切りウィリアムを突き飛ばした。
　負傷していなければ、なんなく受け止められただろう。
　しかし、今の体力では受けきれず、ウィリアムは山の斜面を滑り落ちてしまう。
「きゃ、きゃあああああっ」
　体勢を整えようとしたが、同じように突き飛ばされたシャンティアが落ちてきた。
「くっ」
　ウィリアムは彼女を抱きとめて、転がり落ちていった。

「起きてください、起きてください。ぐすっ」
　シャンティアに揺すられて、ウィリアムは目を覚ました。
　狼の遠吠えが聞こえる。
　辺りは薄暗い――人工太陽が沈もうとしていた。
「早く、わたくしを安全な場所に連れて行ってください」
　一人で逃げようとしたのだが、シャンティアにはどの方向に進めば館にたどり着けるのかわからなかった。
　ウィリアムは体を起こして、動かしてみる。
　打撲と擦り傷が増えた程度で、大きな怪我はしていないようだ。
「……紙、受け取ってたよな？　何て書いてある」
「そんなことより、早く……」
「いいから、出せ」
「は、はい……」
　シャンティアはアーリーから受け取った紙を広げて、ウィリアムと一緒に目を走らせた。
　紙には、彼女の一族のこと、そして最後には曽祖父から生まれたばかりのアーリーへのメッセージが書かれていた。

　かつて、この地には、アーリーの祖先である強い火の魔力を操る一族が暮らしていた。
　一族の中には、いつの時代も、体に龍のような蛇のような痣を持つ女性が１人存在していた。
　女性は聖女と呼ばれ、崇められていた。
　聖女が二十歳になる頃に、一族が護る山に必ず異変が起きる。
　山から溢れる魔力を鎮めるために、痣を持つ女性は山の火口に身を投げるのが慣わしであった。

　およそ１００年前。異変が起きる数か月前に子どもを宿した聖女と恋人がウォテュラ王国に連れ去られてしまった。
　一族は山から溢れる力を鎮める手段を失い、やがて火山が大噴火し、この辺り一帯は滅んだ。
　一族の中で生き延びたのは、子供だったアーリーの曽祖父だけだった。
　森で動物のように生きてきた曽祖父は、数年後に、海岸に訪れて移り住んだ人々――後のアルザラ港町の住民に保護された。

　大噴火後、力が治まった理由は、連れ去られた聖女が出産後に戻ってきて、恋人と共に、鎮めたためと思われる。
　その２０年後も、王国に操られた聖女の子孫が、痣を持つ赤子を犠牲に、この地を火の力の暴走から守ったようだ。

　火の魔力を鎮めるには、少なくとも、聖女と一族の力を有する者の２人の命が必要となる。
　その身を捧げる聖女と、マグマの底の力の発生点まで聖女を連れて行く存在。共に、地上に戻る手段はない。

　　アーリー、君に痣がなくて本当によかった。
　　痣を持つ子を産んではならない。
　　痣を持つ子は、一族の女性からしか生まれない。
　　私たちに家族を犠牲にし、王国の民を救う理由など、ありはしない。
　　君は異性を愛してはならない。子供を産んではならない。
　　家族を儲けてしまった私を許してくれ。

愛している。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
シャンティア・グティスマーレ
ウィリアム